



ハンガリー政府観光局 ニュース 2011年1月28日 No201

- ハンガリー・トップ・テン レストラン2010
- ブダペストの2ホテルが英テレグラフ紙ベスト50ホテルに選定
- JATA・VWC ヨーロッパ販売セミナー&ワークショップ(業界向け)
- 【コラム】まったくしゃべれない言語で会話を続ける方法？

ハンガリー・トップ・テン レストラン2010

Gösser Bock-Dining Guide は、このたびハンガリーにおける2010年のトップ・テン レストランを発表しました。



- **Alabárdos** <http://www.alabardos.hu/> ブダペスト・(王宮の丘)
昨年、王宮内ベストレストランとなり、今回初のベストテン入り。若手シェフによる料理が評価された。
- **Aranyszarvas** <http://aranyszarvas.hu/> ブダペスト (サルヴァシュ広場)
タバーンと呼ばれる王宮の丘とゲッレルトの丘の間に立地する100年以上の歴史を持つ洗練されたレストランで、シェフの完璧な技が楽しめる。
- **Babel Delicate** <http://www.babeldelicate.hu/> ブダペスト (中央市場近く)
繁華街ヴァーツィ通りに立地するレストラン。ゴー・ミヨ・ガイドで15点を得た現代風ハンガリー料理店。
- **Bock Bisztró** <http://www.bockbisztro.hu/> ブダペスト (コリンシア・グランド・ロイヤル内)
08年にも受賞した疑問の余地のない最も人気のあるレストラン。朝食のバリエーションも豊富。
- **Chateau Visz** <http://www.chateau-visz.com/>
ヴィス(バラトン湖南部)
バラトン湖南部の食材を使った、モダンハンガリー料理の先頭を行くレストラン。
- **Costes** <http://www.costes.hu/> ブダペスト (カルビン広場近く)
ブダペストの食通どおりと呼ばれるラーダイ通りで頂点に立つレストラン。ミシュランの星を得、ゴー・ミヨ・ガイドで17得点。
- **Csalogány** <http://www.csalogany26.hu/> ブダペスト26 (バッチャーニ広場近く)
通り番地の名を冠したこのレストランは、色使いや調和の取れた料理を完成させ、高品質ランチという新ジャンルをも導入し、業界へ新しい潮流を導いた。
- **Fausto's** <http://www.fausto.hu/> ブダペスト (エルジェーベト広場近く)
ベニス・ロンドン・NYに続いてブダペストに開業したFaustoによるイタリアン。見せるキッチンという独自の手法も見どころ。



- **Kistücsök** <http://www.kistucsok.hu/> バラトンセメシュ(バラトン湖南岸)
夏のリゾート地であるバラトン湖に真冬でも行くべきレストラン。現地の季節の食材を使った伝統的なハンガリー料理。
- **Onyx** <http://www.onyxrestaurant.hu/> ブダペスト(カフェジェルポー内)
伝統的な調理法と、手の込んだジェルポーの菓子を連想させる進取の調理法を取り入れたレストラン。

ブダペストの2ホテルが英テレグラフ紙ベスト50ホテルに選定

英国の一般紙、デーリーテレグラフのTelegraph Travelが選ぶ世界ベスト50ホテルに二つのブダペストのホテルが選定されました。<http://www.telegraph.co.uk/>

選ばれたのは1泊150ポンドまでのカテゴリーで、Plazzo Zichy、300ポンドまでのカテゴリーでFour Seasons Hotel Gresham Palaceです。

- **Palazzo Zichy, Budapest**
Zichy伯爵の宮殿を優雅に再建した4つ星ホテル。19世紀のハプスブルク時代の気品と21世紀の様式を融合させたデザインで、美しく広々としたロビー、しゃれた現代的な客室、さらに心地よい居住空間。ペスト側の素晴らしい立地条件を備えている。
www.hotel-palazzo-zichy.hu
- **Four Seasons Hotel Gresham Palace, Budapest**
目くらむような百万個以上のモザイクタイルで装飾されたアールヌーヴォーの殿堂。オリジナルの色に着色されたモダンなシャンデリアやピロートの装飾品は21世紀の安らぎをかもし出している。くさり橋のたもとという完璧な立地条件を持つ中欧の新しい貴婦人はドナウの眺望を欲しいままに出来る屋上スパという王冠を頂いている。
www.fourseasons.com/budapest

JATA・VWC ヨーロッパ販売セミナー&ワークショップ(業界向け)

社団法人日本旅行業協会(JATA) ビジット・ワールド・キャンペーン 2000 万人推進室は、2011年のヨーロッパへの需要喚起と地方市場の拡大を狙いとした、『第2回 JATA・VWC ヨーロッパ販売セミナー&ワークショップ』を、2月から3月にかけて全国9都市で実施します。

ハンガリー政府観光局は、次の3会場に参加いたします。

- 2月10日神戸会場
- 2月17日横浜会場
- 3月1日福岡会場

このセミナー・ワークショップについての詳細情報は次のサイトをご参照ください。

http://www.jata-net.or.jp/vwc_index.htm

【コラム】まったくしゃべれない言語で会話を続ける方法？

岡田 佳子／ハンガリー文化センター

——コストラニ・デジェー『エシュティ・コルネール』より

「ハンガリーって英語通じますか？」

これはハンガリー文化センターに寄せられる問い合わせベスト5に入る質問です。「はい、観光地なら大抵使えます。」とお答えしますが、せっかく現地に行くのだから、せめて挨拶くらいはハンガリー語でトライしてみたいもの。「……でも、できると思われてハンガリー語をまくしたてられたら困るじゃない！！」と旅行会話に苦手意識を持っているその



あなた。朗報です。まるでできない外国語を使って、執念でネイティブと一晩中会話し続けたハンガリー人をご紹介します！

彼の名はエシュティ・コルネール。20世紀初頭にブダペシュトで活躍した作家、コストラニ・デジェーによる小説『エシュティ・コルネール』(1933年)の主人公です。この作品は18章の短編から構成され、それぞれの話の多くは第三者である「彼の知り合い」がエシュティ・コルネールを回想するところから始まります。しかしそうこうしている内にいつの間にか語りがコルネール自身の一人称に変わり、えんえんとエピソードが独白されていくという不思議な形式が特徴です。

このコラムでご紹介する第9章は、エシュティ・コルネールがトルコへ行く途中にブルガリアを通過する際、列車で退屈していたおしゃべりなブルガリア人の車掌につかまってしまうというお話です。そしてコルネールは——ブルガリア語がまったくできないにもかかわらず——なぜか「どんなことをしても彼とできるだけ長く、たくさんおしゃべりをしよう」と決意してしまい、既に18ヶ国語を習得している語学能力と類まれなる人間観察能力、さらに想像力を駆使することで車掌と奇妙な「会話」を始めます。

「車掌は帽子のつばに少し手を添えて挨拶した。私はカチリと煙草入れを開け、彼にすすめた。彼はうやうやしく金口の煙草をひっぱり出した。車掌は手前でマッチを探して煙草に火をつけ、全く知らない言語で、どうぞ、というようなことをぶつぶつと言った。私はこれを受けて、さらに彼の手の上へ青い旗のついたライターを差し出し、人生で初めて聞いたその言葉をオウム返しに言った。我々二人はタバコを吸って、吐いて、鼻から煙を出した。滑り出しは確実によかった。今でもこれについて考えると得意でならない。[……]最初の瞬間での私のとっさの振る舞いはたしかに完璧だったのだ。私は彼に、自分が生まれからしてブルガリア人で、そして少なくともソフィア大学の文学教授くらいはブルガリア語ができると信じさせなければならなかった。」

全然ブルガリア語が話せないのに、ソフィア大学の文学の先生のように振る舞うこの図々しさ！！——語学ができると一旦信じ込ませてしまえば、あとは「会話の炎に薪をくべること」すなわち相づちの仕方に集中すれば会話は続くようです。コルネールの努力が功を奏したのか、車掌はそのままマシンガンのようにしゃべるわしゃべるわ、おそらく何かオチのついた話をしながら大爆笑し、ポケットのノートからしわくちやの手紙やら犬の写真を取り出し、薄い紙に包んである2つの緑色のボタンを見せ、また大笑いしたかと思えばなぜかすすり泣き。

「ほんとうのところ、人生の、深い解決不可能なカオスによって私はめまいを感じ始めていた。一体全体なんなの？この多くの言葉と、笑いと、そして号泣に何の関係があるのだ？一方が他方にどういう関係があるのだ。手紙と犬の写真、犬の写真と二つの緑色のボタン、その他全てが車掌にどうつながっているというのか？これは狂気か、それともまったく反対の——人間らしい、健全な感情のあらわれなのだろうか？そもそも、ブルガリア語で、もしくは別の言語でだって何か意味をなすものなのか？私は絶望にとらわれていた。」

さらに怒ったようにも感激しているようにも見える様子でつかみかかれ、コルネールは必死の演技を続けながらも大混乱してしまいます。しまいには喧嘩の様相になってしまい……（あくまでコルネールの想像というところがなんともいえずおかしいですね）。どうする、コルネール！？……大冒険の続きは、ぜひ実際にご覧になってみてください。

海外を旅したり、外国人と知り合う機会があつたりしたらおのずとその土地の言語にも興味がわいてくるもの。「しゃべれない言語」で「会話」という自家撞着を軽やかに飛び越えてしまう主人公の大胆さとコミュニケーション能力はもちろんのこと、ほとんどが独白にもかかわらず、これだけユーモアにあふれた一夜を描き出してしまふ作者コストラエニの筆致にはただただ頭が下がるばかりです。さあ、みなさんも次にハンガリーへ行く時は、ぜひエシュティ・コルネールに倣って、エトヴェシュ・ロラード大学のハンガリー文学の先生かのように、現地の人にハンガリー語で話しかけてみてはいかがでしょう。 Jó napot kívánok!(ヨー ナポト キヴァーノク！／こんにちは！)……ただし、その後の会話の保証はいたしかねます……。

(2010/12/28 岡本佳子)

ハンガリー文化センター <http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/hungary/index.html>

『エシュティ・コルネール』 Kosztolányi Dezső, Esti Kornél

<http://mek.oszk.hu/00700/00744/index.phtml> (MEK、ハンガリー国立セーチャーニ図書館の電子図書館)(ハンガリー語)

ハンガリー政府観光局のホームページにも、1編日本語訳が掲載されています。

<http://www.hungarytabi.jp/bungaindex/litindex.html>